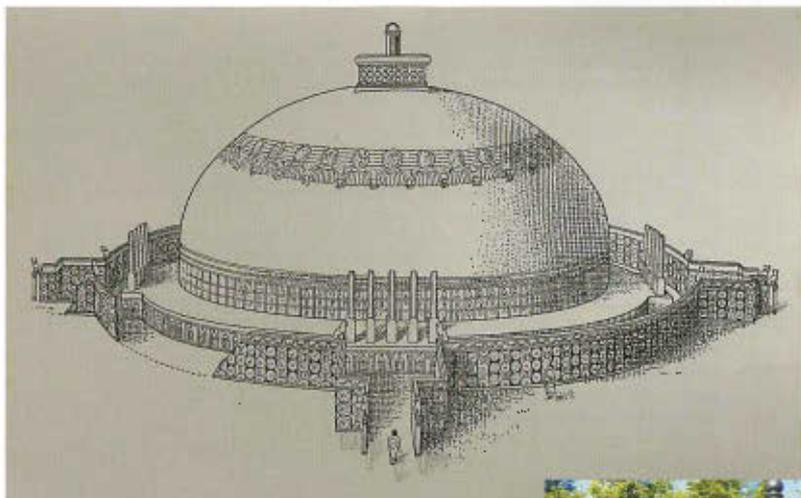


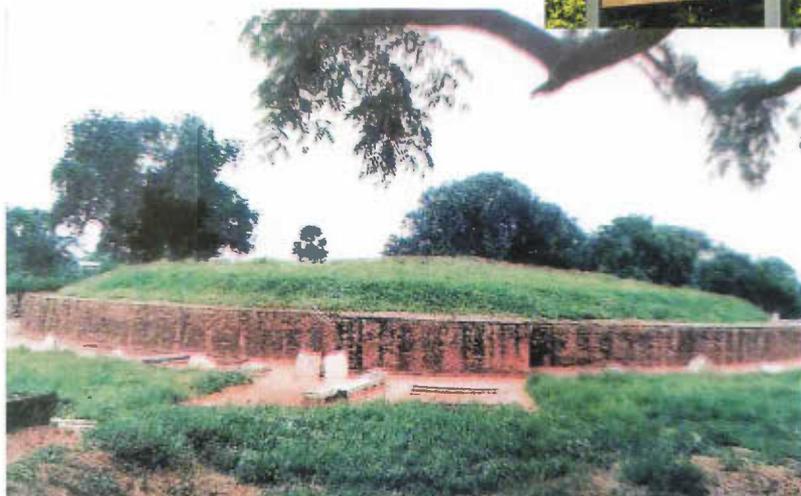
インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No.22

インド・釈尊あれこれ紀行



アショカ王時代に建てられた塔の復元図(上)。
現在は基壇しか残っていない(下)。中はアマ
ラヴァティ僧院(修道院)と書かれた看板



アマラヴァティの塔



朝霧に映えるイクシュバーク王朝時代の建てられた仏塔

中央インドの仏教遺跡、アマラヴァティはインドの東海岸コルコタの南、コルコタから汽車に乗って10時間程で到着する。アジャンタへ向かう途中なので日本人も多く訪れる。現在のアンドラ州にあるアマラヴァティに人類が住み始めたのは早く、石器時代に遡る。石でできている斧、矢じりが発掘されている。また、人々を葬るメガリック（ストーンサークル）も残されている。

カリンガ王国時代の紀元前3世紀にアシヨカ王がこの地を征服し最初の塔が建てられた。塔は信者たちによって建てられ、西側の門には釈尊の説法を表す法輪が刻まれている。

アンドラ州最大のこの塔は、基壇の部分で直径が約49メートルある伏せたお碗（覆鉢）の形をしている。周りの石には四仏伝図、生誕、出家、成道、初転法輪、入滅が彫りこまれている。

骨、金箔の入った5個の舍利容器が見つ



リゾートホテルを思わせるような僧院の施設

かった。周囲の岩には36の柱、とそれを支える多くの横木がみられ、回りを囲む回廊がある。現在は基壇しか残っていないが、14世紀までは原型をとどめていて、7世紀に玄奘三蔵が訪問した時の記録にも残っている。

現在も残るアショカ王時代の石柱13番には法、すなわち「仏教の教えに従って国を治めるべき」と記されている。刻文はその後書き加えられた。

アショカ王のマウリア王国の後、いくつかの小国が支配し、2世紀から3世紀半はサータヴァーハナ王朝、次にこの地を治めたイクシユバーク王朝は、南のナーガルジュナコンダに都を構え、仏教を保護しさらに多くの小さな塔が建てられた。その後、4世紀から14世紀までパツラバラ王朝までは仏教が盛んで、塔は原型をとどめていた。

その後の刻文でも仏教が14世紀まで大きな影響力をもっていたことがわかり、また、シユ



タイから仏教徒が多く訪れている。筆者は1962年と1970年代と二度訪れているが、本稿写真は70年代に撮影したもの



世界各国から訪れる観光客に遺跡の説明がされている

リーランカー（旧セイロン）の刻文で、1344年にも修復がなされたこともわかる

パツラバラ王朝後は、チャールキヤ王朝、ヴィジャナガル王国と続く中で、アマラヴァテイの仏教遺跡は衰退するが、18世紀にイギリス人により再発見された。そして、バルフト、サンチ大塔と同じ流れである彫刻は全て大英博物館に保存されることとなり、アマラヴァテイの遺跡には残っていない。

ちなみにこの地で栄えたのは大衆部でその他の部派の名前はない。現在は仏教遺跡には珍しく僧院の各種施設が整っていることもあり、タイからの仏教徒が多く訪れている。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドテリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学部長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有餘回。著書に『フツタガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。